

〔書評と紹介〕

***Tsugaru, Regional Identity on Japan's Northern Periphery* を読んで**

石堂 哲也

1

北原かな子・郭南燕編『津軽の歴史と文化を知る』の英語版、*Tsugaru, Regional Identity on Japan's Northern Periphery* (2005) が弘前大学と姉妹校関係にあるニュー・ジーランド、オタゴ大学出版局から出版された。

2004年に出版された日本語版（岩田書院）には、長谷川成一氏「一体の像から―大浦光信像と津軽氏―」、北原かな子氏「明治初期津軽地方のキリスト教文化受容」、河西英通氏「津軽の地方主義と国民国家日本」、郭南燕氏「長部日出雄の文学―津軽の独自性と普遍性との間―」、ヘンリー・ジョンソン氏「津軽三味線―地方と国家、そして国際的空間を行き交うものとして―」、アンソニー・ラウシュ氏「津軽塗り―地方工芸に対する国家の保護―」の6つの論考が収められていた。これらについては既に本誌118号に金森正也氏の書評がある。

英語版では上記6点の論文に加えて、ロイ・スターズ氏の「太宰治の作品における国家と地方」(Roy Starrs, "Nation and Region in the Work of Dazai Osamu")と笹森建英氏による「津軽の演芸芸術」(Takefusa Sasamori, "Performing Arts of Tsugaru")が新たに収められた。

笹森氏は津軽地方に江戸期から伝えられる演芸、民間芸能等を、1) 能楽、2) 平曲、3) 雅楽、4) 尺八、5) 箏曲、6) 神楽、7) 「いたこ」の口寄せ、8) 虫送り、9) ねぶたまつり、10) 獅子踊り、11) 盆踊り、盆歌、精霊流し、12) 登山囃子、13) 山車、14) 裸参り、餅搗き踊り、の順に要約し紹介をしている。

それぞれの芸能、演芸の起原、津軽地域への導入の経緯からその後の変遷、そして今日の状況に至るまでが30―50行の平易な英語で記述されており、読む者にとっては極めて明確で分かりやすい。このように、誰にでも、特に日本人以外の読者にも分かりやすく書くということは、大変むずかしいことであろうと思う。かつ、これらの記述はただの紹介文ではない。

たとえば、ねぶたであるが、坂上田村麻呂の蝦夷征伐で云々、という怪しげな起源説には一切触れず、「ねむりながし」から記述しているのは当然のこととは言え、英語版の読者に想定されている人々に対する筆者の姿勢を感じる。

そして、(これはむしろ、自分の無知に驚いたと言うべきかも知れないが)、淡々とした記述を追いながら、明治とは、近代化とは、こういうことであったのか、とまさに目から鱗の落ちる思いであった。

つまり明治期、小学校での種々の式典で奏された音楽は雅楽であった(人々はどのような思いで聴いたことであろう)という。そしてその頃、津軽では江戸期から伝わる民間芸能や習慣、行事が禁止されていくのである。

「いたこ」の「口寄せ」が禁止され(1873年)、ねぶた祭りが「野蛮で粗野」であるとして禁止(1873―75年)される。同じ頃、それまで若い男女の出会いの場であった盆踊りが「社会への悪影響」を理由に禁止された。

ところが逆に1872年には、岩木山のお山参詣

の女人禁制が解除されている、という。

これを見ると、近代化を急ぐ明治政府が前近代的権威をふりかざして人々の生活と習慣に次々と禁止と開放を与えていった様子が分かる。その時々の人々の戸惑いと混乱はいかばかりであったか。「近代化」などという言葉が普段安易に使っていながら、身のまわりでどのようなことが起きていったのか、分かっていたようで分かっていなかった。

これとほぼ同時期に設立された東奥義塾（1872年）の歴史を北原かな子氏が克明に辿っているように、旧藩校が宣教師を招いて若者の教育をし、それでいて純粋な意味でのミッション・スクールとはならなかった経緯も、このような文脈のなかで考えるとよく分かる。

以上を念頭においてスターズ氏の論文を改めて読んでみる。これは1868年以降の日本の急激な近代化のなかに太宰を置いて考えようとする試みである。粗雑な要約で恐縮であるが――

教育制度の整備によって短期間に文化的均質化を達成しようとした国では、長い世代をかけてこのような変化を経た国に比べると、近代民族国家を支える政治、イデオロギー、文化の特質が露呈される。加速度的に進む変化がどれほどの社会的、心理的緊張を産んだか、20世紀の日本の作家たちの多くが自殺している事実が証言している。

時に津軽の人間は「粘り強く、寡黙で、生真面目、質実で、陰気だ」と言われ、往々にして太宰の作品をそのような気質と関連づけて理解される向きもある。たしかに人間の気質、思考は環境、風土に影響されるが、「陰気なイタリア人」もいれば「陽気なスウェーデン人」もいるではないか。

太宰は明治以降の日本の民族国家としての進

展をじっくり考えてみるのがなかった、自分の生きた時代を捉えるべきより広い歴史的視野がなかった。

いまでこそ、世界規模で進行する文化の同質化が憂慮されているために、地域の特質を重視する視点が支持されるようになってきたが、太宰の時代では、どのような形であれ地域的特質（regionalism）は国家的、民族的統一と進歩に対する障害に他ならなかった。

もし、彼がいま少し生きていたら日本の中央という覇権に挑戦し、東京に宣戦布告するような小説を大江ばりの（Oe-esque）スタイルで書いていたかも知れない、と。

## 2

私の専門はアメリカ研究で、本誌から書評を依頼されるべき心当たりがさしあたりないのだが、あるとすれば、私が英語の教師であるということと、黒石（当時は）町生まれで、津軽のネイティブであるということくらい。以下、的外れを覚悟のうえで読後の印象を記す。

まず、これらの論考を英語に訳出したその労に敬意を表したい。「廃藩置県」と言えばそれまでだが、「封建領土（feudal domains）を解体し政治的実体（a political entity）へと再編（recast：鋳型に入れ直）した」（p.13）という記述が必要になる。しかもその際、すでに定着した英語の訳語があるか全て調べたうえで作業をしなくてはならない。さもないと読者は混乱する。この労力は並大抵のものではない。

目次等を除き、本文では日本人の名前を姓・名の順に記述しているのも気持ちがいい。ドナルド・キーン氏などもこの表記法をとっているが見識である。

そのキーン氏の文章を読んで時折経験することであるが、日本語で理解していたつもりなのが、分かっていなかったことに気付き、それまで分からずにいたことが腑に落ちるということがある。英語によって記述された津軽の事象を読むことは、日本語の説明を他言語に置き換えただけのこととは、当然のことながら、違う。

スターズ氏の記述で、先ほどやむを得ず「質実」と置き換えたものの形容詞は "down-to-earth" で、質素で地味だけでなく現実的、実際の態度をさす。津軽の気質を述べるステレオタイプとしてあげられた形容であるが、その "down-to-earth" という形容詞が、"humble" (謙虚でつましい、みすぼらしい) の語源と繋がっていたことをふと思い出したりするのである。("humble" の語源はラテン語 humilem, 原義: on the ground ← humus=ground)

序文の冒頭で、東北は均質的な日本 (homogeneous Japanese state) にあって、「独特で異質の地域」(a unique and distinct region) である、と記述している。この unique でまた考え込む。

言うまでもなく、「ユニーク」とは「単一の」(ラテン語 unus=one) の意味で、単一であるからほかには無いのであり、したがって、これに副詞をつけて very unique (非常にユニーク) という表現は論理的に不合理である。英語表現の用法に厳密な人は、これを誤用とすることもある。本書の中には very unique という表現は出てこないのである。

実に津軽はユニークである。他にない。日本各地がかつてそれぞれにユニークであったように。しかし、均質化しようとする力は、単一性を否定し、独自性を乗り越えるべき欠陥とする。河西氏の詳細な論考にあるように、津軽の「若い世代は極端な劣等感に苦しむ」ことになる。

劣等感 (inferiority complex) も優越感 (superiority complex) もコンプレックスである。無意識のうちに当人の言動に影響している一群の観念である。太宰は「つしま」と発音するのに苦勞したと言う。長部日出雄氏は(講演等を聞く限りでは)津軽のイントネーションを維持している。

津軽の人は無口、寡黙であると何度耳にしたことであろう。私の経験ではそういうことはない。陰気なイタリア人、陽気なスウェーデン人がいるように、口数の少ない津軽人もいればおしゃべりな津軽人もいる。むしろ、仲間内では饒舌な文化である。彼等が(私の場合、私達が)寡黙になるのは外部の人に対してではないか。支障になるのはことばではない。出会った外部の人が自分もユニークな文化のなかで暮らしているという自己認識を持ち合わせている人であれば、打ち解けて話をする。しかし、外から来た人が優越感というコンプレックスをもっていれば、口が重くなるのは当たり前ではないか。

「かみ(東京方面のことを言う)から」ある大学のエライ学者が農家に調査に来て、いきなり「横座」に座ったという話を直接聞いたことがある。「なにを聞かれても話す気がしなかった」のは当然であろう。

これが継承され、鬱積すると、自虐的表現、自嘲的笑いになる。津軽塗りを「ばか塗り」と言い出したのは誰であろうか、そしていつごろであろうか。すべての伝統的工芸品の製造工程には必ず「ばか」丁寧な根気のいる作業が伴うはずだ。西陣織をばか織りと言うであろうか。

柳宗悦は無名の人々が造った工芸品を「下手物」と読んだはずではなかったか。それが、「民芸品」に出世したのと対照的である。

英語版には日本語版にない何枚かの写真が収められている。その一枚に飽かず見入ったことであつた。大正時代の（おそらく小作）農民の男性と三人の子供が座って何かを食べている。父親らしいこの男性のいかにも人のよさそうな表情とそこに映されている驚くべき貧しさを見て、金木の津島家の繁栄も彼等の労働によって支えられていたのであるから、程度の差こそあれ、日本のどこであれ、私達はみなここから来たのだ、と思うのである。

これと対になる頁に、白いソックスにスニーカーを履いた子供たちが岩木山神社前に鐘太鼓のお囃子を奏でながら到着した現在の岩木山参詣の光景が配されている。その対称は絶妙である。

[数は少ないが、誤植があつた。気付いたところのみ記して置く。

p.14, l.7 this w(a)s    p.65, l.1 modem → modern

p.129, l.1 const(r)uct]

(英語変型 言語－英語 本文160頁 価格

49.95NZ \$ 国内－アマゾン価格4067円)

(いしどう・てつや 弘前大学人文学部)